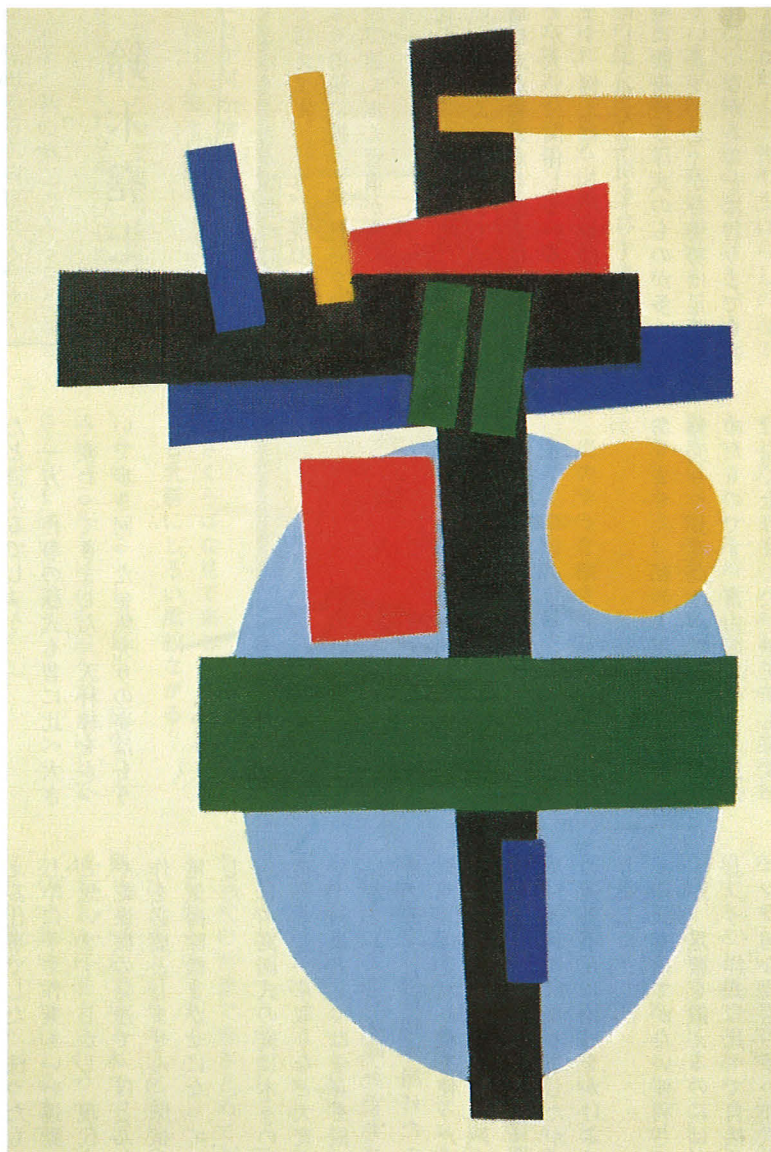


文化高知

'98年5月 NO.83



「コンポジション」宮崎嘉夫

(財) 高知市文化振興事業団

和式と洋式

鈴木堯士

私達日本人は膝が曲がり、腰が落ちてトボトボとガチョウスタイルで歩き、欧米人は膝も腰も伸びて一本の棒のように歩くと言われています。これは欧米人がかつて広野に広がる平地や丘や山を狩猟民族として駆けずり回っていたのとは違って、私達祖先は早くから農耕民族として田畑で働いていたことと無関係ではないと思います。

つまり、日本人はあまり手を振らず、腰から下だけで歩み、地形や労働に向いた合理的な動きを自然に身につけていたのだと思います。それがさらに強調されたのが盆踊りや日本舞踊のような踊りや日本古来の伝統芸能である「能」や「歌舞伎」の世界なのです。

このように日本人の和式の歩き方はもともとゆっくりとすり足で、

静々と歩くことが習慣づけられてきたと言えます。一方、欧米人は腕を大きく前後に振って、背筋を伸ばし大股で速く歩く習慣が身につけています。

昔の日本人の方が足腰は強かった、という話をよく聞きます。これには、生活様式が和式から洋式に変化したことが大いに関係していると考えられます。例えば、トイレは和式のようにしゃがんで用をたすものから、便座に腰掛ける洋式のものが多くなっています。しゃがむ姿勢は足腰の強化につながることは言うまでもありません。

また、寝具も最近では簡単に横になれるベッドの利用者が増えてきており、かがむという動作や布団の上げ下ろしの労力が減りつつあります。また、洋間が普及してきたため、椅

子やソファーに座ることが多く、座布団に座って立ち上がるといった中腰の動作も減ってきています。中腰になる、ということは運動量も多く和式の方が足腰を使う生活様式だったと言えるでしょう。



り・脱穀すべてが機械化・自動化されています。家庭でも昔は洗濯するのに、タライと洗濯板を使って汚れ物をゴシゴシ洗ったものです。中腰で足腰を鍛える仕事でした。洗ったものを物干し竿に干す作業もいい運動になったと思います。しかし、現代は洗濯機や乾燥機の発達で、ほとんど動く動作を必要としません。床拭き作業も電気掃除機まかせになってしまいました。

日本庭園式の庭は木々の枝切り・葉落とし・草取りなど大変な重労働で、結果としては全身を鍛える運動になったことは確かです。最近では、庭の手入れは植木屋にたのんだり、草刈りは芝刈り機を使うため、せっかくの全身を動かすチャンスを逸しています。この機械化は確かに簡単・便利にはなりましたが、日本人の運動不足に拍車をかける結果となりました。

洋式も捨てがたい便利さはありませんが、足腰を鍛えるには不向きでしょう。洋式に比べて自然にトレーニング的な要素の多い和式の生活スタイルを、もう一度見直してみるのが無駄ではないかも知れません。

すぎたかし・高知職業能力開発短期大学校長
・高知大学名誉教授

霧の町窪川……ひと日を久方に父母と過ごし、山ふところの駅を離れゆく列車にいる。みじかいトンネルを抜けて、母が子供のころよく泳いだという川の水面をちかちかとおぼろげに遠ざかる。水に添って菜の花の黄いろもながれてゆく。

ふるさとの水のながれにこころのこし沿ひてゆきつつ離れゆきたり

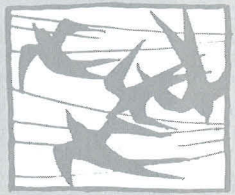
右方の山の間には小さな青い海が顔をのぞかせた。ついさきほど、実家

の父の気持ちを考える。つかの間胸はせつないまでのブルーと白に浸される。私が一昨年、幸運にも出版することのできた歌集『この先 海』

のわたしの海も、父と同じ土佐の海・きらめく土佐のまぼろしの海であった。私は高知の海が好き、山が好き、雲が好き、空気が好き、人間が好き、である。

港の駅を出てからはもう海は見えないけれど、巡る山の辺の芽吹きはじめた樹木の中に、ポツポツと山桜

五月の窓辺



のはなが何か物言いたげなその彩をあらわして初々しい。

わがこころやまにあるならさくらばなうすくれないのにじめるあたり

やがて、私の第二のふるさととも言える佐川の町へ列車は入りゆく。

ゆつくり眺めていたのに、電車も時間も止まってくれない。和楽園、奥の土居の桜を、車窓に身をよじり振り返りつつ仰ぎ見る。ふたつのさくらの苑の染井吉野はほころびはじ

めたばかりのようで、咲き初めののくれないがこころに火をつける。

私をはじめ短歌を創ったのは、この桜の町佐川を離れるときのことでした。さくらの花も人のこころもうつろいこの町に親しみて五年を過ぎ、他の町へ移り住むことになったときでした。

炎のやうな桜さくらのやうな樹水あり人に別れを告ぐるべからず

兵頭なぎさ

さくらばな見て来し夜を泡につつま乳房にしるい風紋ながる

それからこうして毎年、桜のころには、こころに花を追うようにしてさくらを詠います。

ちちふさに散りしはなびらのつめたさの沁みとほりつつ詩歌の塵

『文化高知』一月号の「本を取り巻く話」を読んで、へ朝の読書十分間運動」というところが広がりつ

つあることを知りました。私も毎日すこし本を読み、そして毎日すこし書いていたいとおもっています。読書は「ひかり」のようで、書くことは「自由」になること……。短歌でなくてもいいのです。何か自分を表現することができたら、こころが少し軽くなってすこしだけいづちがふかくなるような気がするのです。

うたをつくることは、どこか宗教にも似ていて、みづからの奥ふかく階段を降りてゆくような感じなのです。朝は読書に始めて、眠る前にちよつとだけペンを持ってみませんか。睡眠効果もあるようです。

現代短歌は、現代の詩を定型で書く詩型。現代という魔物とたたかう子供達と共に、自己批評・文明批評をこめた一つの声として、現代の詩を現代の言葉で書きとめてゆけたらとも思うのです。

ひとりよがりの自己満足のうたを創りつづけている私ですが、裡なるはちきんに励まされつつ、私の息づかいで詠いつづけてゆきたいと念じております。

花に逢ふ樹にあふ人にあふために生きてあるとおもふ五月の窓辺

(ひょうどうなぎさ・歌人)

第八回高知出版学術賞の審査を担当して

今井嘉彦

あげていることに特徴があり、今後この方面の研究者に貢献するところが大きい作品であると高く評価された。

中内光昭著

『DNAがわかる本』

岩波書店刊

本書は第十七回寺田寅彦記念賞を受賞した作品であるが、DNAという専門家でなければなかなか理解できない内容を、細胞の身になって解説しており、実にわかりやすい解説書であると高く評価された。著者は発生生物学の専門家であり、DNAは著者の長年にわたる講義録の集大成とも言えるものである。特に著者が専門的に扱ってきたホヤなどの素材を使って、新知識の解説を進めている点も理解しやすい要素となっている。

先ず生命活動にとつてのDNAの

高知出版学術賞は、次第に「学術」に重点を置いて顕彰されるという意図が徐々に理解されてきたためか、本賞にふさわしい作品が相当数寄せられるようになった。本年度も15点の推薦があり、いずれも本格的に研究に取り組んでこられた足跡がうかがえる優れた作品であった。

審査は内川清輔、瀬戸勝男、田村安興、松崎沙和子の各氏に私を加えた5名が担当し、つぎの3点選ばれた。

松岡 信一著
『土佐自由民権を読む』

青木書店刊

停刊、解除を繰り返す民権派機関紙である「高知新聞」「土陽新聞」「高知自由新聞」「江南新誌」「土佐新聞」、反民権派の「高陽新報」「弥生新聞」等を読みぬいて、土佐民権運動の全容を描いた労作であり、著者の長年にわたる忠実な資料整理によって生み出された実証性の優れた作品として高く評価された。

土佐の民衆に民権運動が定着してから、全国で激化運動が勃発するまでの時期、すなわち一八八〇（明治十三年）年から一八八四（明治十七年）年までのいわば民権運動全盛期の新聞資料を丹念に読み、民権期の歴史を再構成しているところに学術的な成果がある。特に一般民衆の視点に立つて土佐の自由民権運動をまとめ

意味について述べ、第二部ではDNAと人間生活との関わりについて述べている。最近の動向として、DNAに関する解説書が多い中で、学術的な水準を落とさず、解説に成功していることは例が少ない。学術用語も平易な文章で解説され、ジュニア新書としての貢献も高く評価された。

竹本義明編著

『今村楽歌文集』

土佐史談会刊

今村楽は近世土佐を代表する文人であり、武藤平道、楠瀬大枝らを導

くなど土佐の文化・文政期に花をもたせた先達でありながら、その名を知る人は少ない。本書は、今村の作品や手紙などもれなく収録し、系譜の整理、解説など論考を進めている。貴重な資料を発掘した貢献度の高い学術書として高く評価された。特に長年にわたる研鑽による膨大な集大成であり、大変な労作であることも一致して高く評価された。土佐の文化を育んできた先人の発掘は、極めて地味な営為であり、だれもが成しえない価値ある成果である。今後の研究にも貢献するところが大き

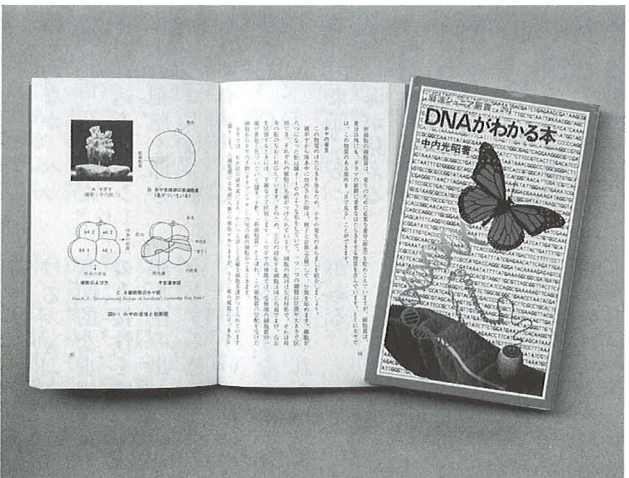
い。以上の三点が入選作品となったが、その他にも松岡司著『武市半平太伝 一月と影と』並びに土佐西畑デコ芝居編纂委員会編の『土佐 西畑デコ 種々な観点で評価した結果、上記三点が選ばれた。本県においてこのような多様な学術研究が進められ、文化の発展に寄与していることを改めて実感した今回の審査であった。

（いまいよしひこ・高知出版学術賞審査委員長・高知大学名誉教授）

入選作品



松岡 信一著「土佐自由民権を読む」(青木書店刊)



中内光昭著「DNAがわかる本」(岩波書店刊)



竹本義明編著「今村楽歌文集」(土佐史談会刊)

幕末の青春

—坂本龍馬の生涯



激動の幕末期を駆け抜けた坂本龍馬の一生を、史実に基づき分かりやすく描いた、子どもから大人まで親しめる屈指の龍馬伝。

四六判・168頁
本体価格 1,165円

山本 大 著

思いっきりみとめて子育て

—子育て 個育て 親育ち



保育者としての長い経験からみた子どもたちのいきいきとした姿。その豊かに育っていく過程を描きながら子育てを考える。

四六判・352頁
本体価格 1,553円

藤本 稔子 著

清流を子らへ

—21世紀に残したい鏡川—



時代とともに急速にその姿をかえる鏡川。その変貌ぶりを憂い、何とか清流を復活させ次代の子どもたちに残したいと研究会メンバーがおくる熱いメッセージ。

A5判・122頁
本体価格 1,000円

高知河川環境研究会編

都市へのまなざし

吉田 晋

たとえば、朝、目覚めたとする。春の朝の心地よい陽光のなか、ベッドから抜け出すには覚悟が必要だ。一気にバスルームにかけ込み熱いシャワーを浴びる。体中の細胞を叩き起こすのだ。それから、コーヒーを入れよう。テレヴィのスイッチを入れ、ポリウムを落とし、CDの山から一つを取り出す。

僕のマンションは市内東部にあって、晴れた朝には窓から海が見える。南国の春の空と海と街を眺めながら、なぐれこむ風とシンクローするジョアン・ジルベルトの囁きとピアノの軽快な音に耳を傾ける。壁にはパウ・クレールのポスター。舌が火傷しそうに熱いコーヒーをもう一杯、流し込む。そして、ベランダから街を眺める。

街に住む人間のありふれた朝。その中でベランダからの眺めは、テレヴィのモニター、スピーカーから流れるCD、展覧会で買ったポスター、そして熱いコーヒーとシャワーと普通だと新聞と全く同等に僕らの生活を豊かにしてくれる。その意味で、ベランダからの眺めは、シヨウウィンドウの中と同じメディアII虚構であるといつてよいのかもしれない。しかし、このように生活がリアリティを失っていることを嘆くのではなく、むしろここから拓かれる新たな

な世界にこそ目をむけるべきであろう。意図的な虚構から生の直接性を感じる体験を生み出していることとする感性を育もう。そういった「都市へのまなざし」にこそ開かれた出発点がある。

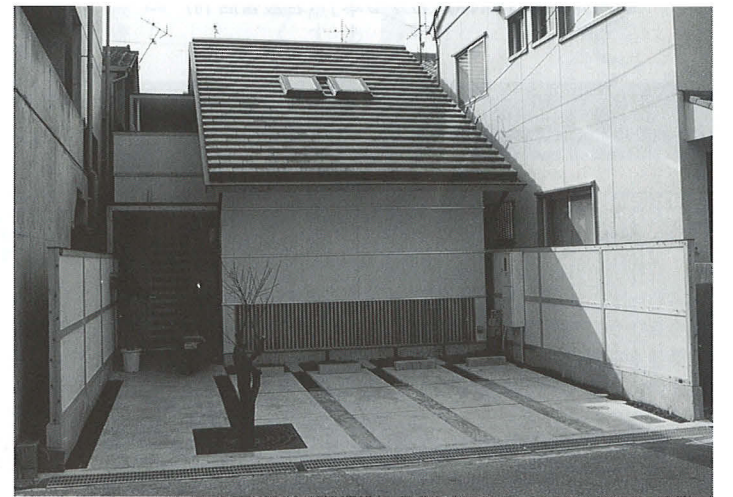
高知市都市美デザイン賞も今回で十四回を迎えた。今回から審査に加えていただいた私を含めた各選考委員による現地調査と議論の結果、以下の三件が選ばれた。今回の受賞作品はサイズも用途も様々であるが、それぞれ独自の「都市へのまなざし」を表したものと評価された。それぞれの「都市へのまなざし」を見ることが作品の講評としたい。

「都市の棲み家（すみか）」

裕福な一部の人々を除けば、都市に棲む、あるいは都市に棲んでやろうという意気込みが必要な時代になっている。都市に棲むのに、相應の覚悟が必要なのである。いうまでも

なく、住宅は個人の所有物である。そして、住宅が当たり前前にデザインされているのならば、それぞれ個人のライフスタイルあるいは好みを表しているはずである。

この住宅は、その個人のライフスタイルに「都市へのまなざし」が存在する。高級な素材や高い壁にではなく、その前庭に、そこに立つ一本の樹木に、そして都市に対するその佇まいに「都市に棲みたい」という心意気が表現されている。小住宅な



嶋本邸
発注者：嶋本勇雄
設計者：艸建築工房

がらも都市に棲んでいるんだ、という（良い意味での）プライド。都市はそういった「まなざし」の集積により、さらに新たなダイナミズムを生む。

「都市の窓」

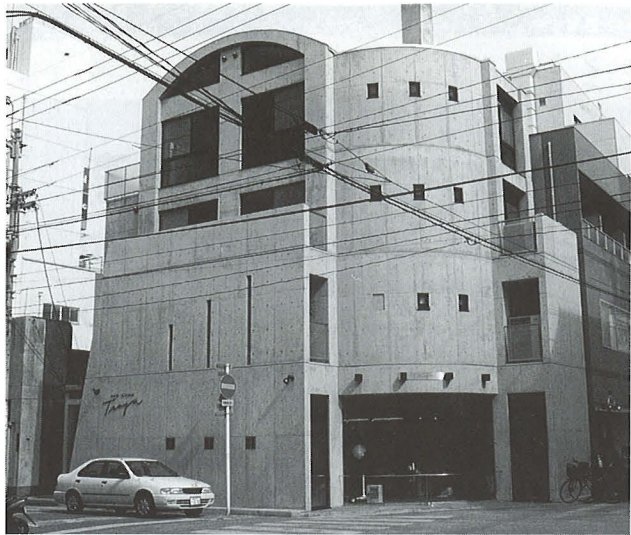
このヘアースタジオは市内繁華街のある角地に立っている。精度の高いコンクリートによる打ち放しのマッス（量塊）の街路部は二つに分節され、隅部は垂直性を示す円筒として処理されている。一階のコーナー

の絵を掛けている。「図」としてのガラス面と「地」としてのコンクリートの対比。さらに、ガラス面は内部のアクティヴィティを映し、発信していると共に街を写す鏡でもある。「図」ばかりを強調するド派手なネオンサインや巨大な広告塔といった競争には加わらず、一歩下がって真実を示す誠実さ、商業建築としての「都市へのまなざし」のあり方の一つである。

「都市のスカイライン」

景観やスカイラインといったものは、その影響力の大きさ、及びそこから逃れることができないという意味において、パブリックなものである。市内で二つめの高層建築はそのシンプルなデザインとインパクトにおいて、高知のマクロ（巨視的）な都市景観を形成している。

ただ残念なところはウォーターフロントであるにも関わらず、鏡川や



ヘアースタジオTsuya
発注者：西村康子
設計者：(有)TAG建築設計事務所

堀川との関係が歩行者レベルで明快になっていないことと、公開空地のアウトオブスケールである。これらは市民総合文化プラザ（仮称）や堀川の整備などを含めた周辺地域の整備の際の課題としたい。が、それは何もこの地区に限ったことではない。現在の高知の川沿いにある建物のほとんどが川にオシリを向けているからだ。

都市を楽しむ

今回の受賞作品は、それぞれ「棲み家」「窓」「スカイライン」といったように「都市生活を豊かにする装置」として機能している。それを成り立たせるものは「都市を楽しむ、あるいは都市を楽しんでやろうというプライド」である。そういった「都



旭口イヤルホテル
発注者：旭観光株
設計者：西川設計
鹿島建設(株)設計エンジニアリング総事業本部

市へのまなざし」が都市をある瞬間には虚構として、ある瞬間には生の直接性を感じる現実として成立させるのである。テレヴィを見るように、CDを聴くように、「街を楽しむ」を、熱いコーヒーを楽しむように、「街を楽しむ」があるいは楽しむもうとする心意気が高知という街を、そしてそこに暮らす人の生活を豊かにしてくれる。

肩肘はらなくてよい。もはや街はそこで生活する者にとってリヴィングであり、ダイニングであり、ベッドルームなのだから。そういった「都市へのまなざし」こそが、街に日常に息づくヴィヴィッドかつダイナミックな美を発見する、あるいは生み出すことができる。

（よしだしん・高知工科大学）
助教授・建築家

高知の経営者とお会いして思うこと

中川香代

高知へ来て四年目になります。私は東京生まれで東京育ちですが、ルーツは東北の山形県です。

十年ぐらい前に、新聞でだったと思うのですが、四万十川のキャンペーン企画をみつけて、「川下りと鯨ウォッチングの旅の招待」に大きな期待をかけて応募しました。

当時、四万十川はカヌーイストのエッセイなどで世間のあこがれも高まっていたので応募者は多かったです。美しい写真入りのカタログだけが郵送されてきました。わたしは院生でしたので旅行するお金もなく、高知とも「これで縁が切れたか」と思いました。

東京者に限らず、四国を正確に知らずにいる人は多いものです。デフォルメされた漫画のような日本地図では、四国が十字に区切ら

れ、そのうちの左下が高知県だったりするので、そう思いこんでいる人もいます。そして高知が他三県と山脈で隔てられていることや、平野は二〇％に満たないことなどあまり知られていません。

テレビでは桂浜や、台風の室戸・足摺岬の中継をよく見ているので、高知県は海のイメージが非常に強いのです。なにを隠そう私もスキューバダイビングを趣味とするので、高知大学で働きながら、アフターファイブは桂浜で毎日潜れると思っていました。

高知にやっつけてきて高知を正確に知りつつあると同時に、地方にきて初めて東京というものを違った感覚で感じています。中央としての機能と、産業その他の集積度を改めて実感するとともに、マスコミを通じて常に「日本イコール東

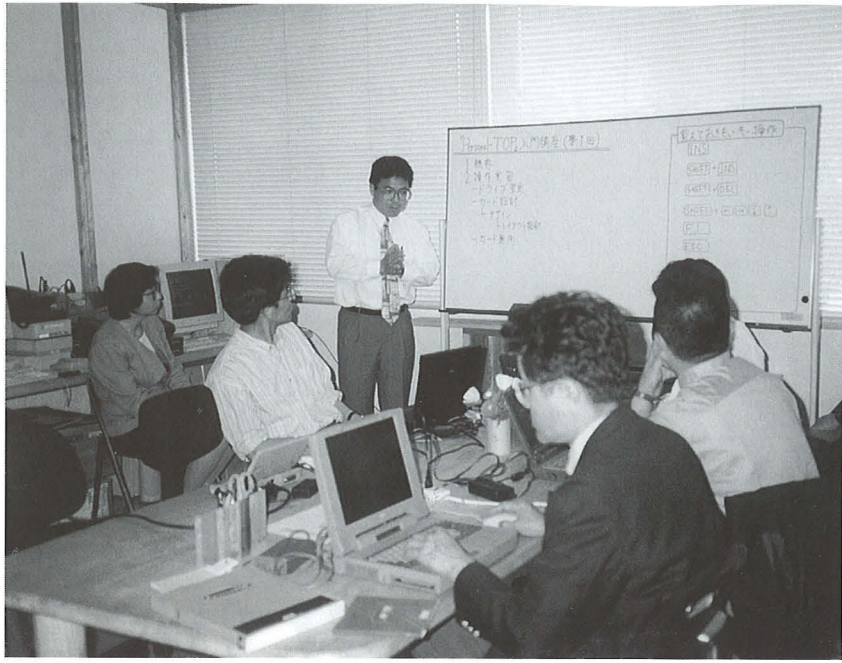
京」であるかのような報道がされるたびに、編集者の怠慢と傲慢、そして一極集中政策の弊害、それによる地方のパワー不足を感じてしまいます。いくつかの都市が東京と違った個性を放てば、日本はもっとおもしろくて豊かな国になるはずですよ。

四月七日に、県が「県政の主要指標」をまとめましたが、「県民所得全国四十二位」「製造品出荷総額四十六位」「財政力指数最下位」と、なんとも寒々しいランキングが並びました。これらの指標だけから高知県を想像すると、閉塞感ただよう静まり返った地か、または南国の楽天的な地をイメージしてしまいがちです。

しかし、実態は、県下に数多く

哲学があり、実践力があり、気骨もあり、また柔軟でもあり、考え悩むところもあり、経営実践にまつわるおもしろい話があるものです。

最近、私が関心をもって注目さ



情報システムの開発に取り組む経営者の方々

せていただいているのは、中小企業情報センターの「情報化モデル企業育成事業」の支援を得て、自社の情報化を成功させた中小企業の経営者の方々の活動です。現在は自社システムのさらなる向上をはかりながら、地域における他社の情報化の指導者として活躍し、また自社のショールームを交流の場として情報化サロンも開催しています。

自らが情報システム開発をなし遂げ、引き続き草の根的な情報化の根をはっていかうとする経営者らの生き生きとした活動には目を見張るものがあります。その『実施報告書』から、システムの開発過程における、一時期の挫折しそうなほどの悪戦苦闘がうかがえます。

しかし、それをくぐり抜けた現在、指導や啓発普及活動にあたっての会場でお会いすると、どの経営者も「実に楽しい」といった顔をしています。しかも楽しいのは、情報化にまつわることだけではなく、信頼できる仲間との交流関係がつけられたことによってもたらされてもいて、システム開発が業務革新への意欲につながっていること、企業全体が「元気」になっていること、

の企業が存在して活躍しています。例えば、和紙のハイテク産業は世界を市場としていますし、船舶クレーン製造業やソフトウェア業のなかには全国シェアの高い企業があります。また環境関連機械製造業での成功事例も多数あります。国際的にも技術が目ざされている建設機械製造業など、私の知るどころだけを数えても話題の企業は少なくないのです。また、競争激化と不況に苦慮しながらも技術向上をはかるのに懸命な工作機械製造業や、海外視察をして全国にさがけて顧客満足を追及するスー



学生も生き生きと課外の自主ゼミを行っています (中央が筆者)

これまで日本の経済力を牽引してきたのは大規模企業ですが、経済全体のシステムの微細な部分までの安定を確実なものとしてきたのは、あらゆる分野を含めた小規模な企業です。世界に冠たる日本の技術にしても、そうした小規模な企業の技術やサービスによって、全体として精緻で迅速で良質なものとなっています。これからも小規模な企業が実力を持ち活性化することは、経済全体にとって改め重要な鍵となることでしょう。

いごっそうは「我がこそが一番」という意識が強く協働体制がとれない、それが高知県経済の低迷の理由のひとつだと、着任当初あらこちから聞こえていました。しかし、上記のような取り組みは、そのようなことはないということを示してくれています。このように、参加者が互いに生き生きとする関係、エネルギーを高め合う場が高知県に成長しつつあります。そこに触れさせていただけで、自然も、人も、企業も、最大限活かしてこそ豊かになるのだと強く感じる今日この頃です。

(なかがわかよ・高知大学人文学部社会経済学科助教授)

動物たちの子育て ④



中西安男

《カモシカの放任主義》

高知県に生息する、野生のニホンカモシカにとり憑かれて早くも八年目を迎える。これまでに様々なことを私に教えてくれ、私を随分と色々な意味で成長させてくれた。私にとっては先生であり、かけがえのない友である。

野生カモシカたちの子育てを覗き見ることは、動物園の動物のようにはいかず、野生の警戒心が私を寄せ付けてはくれないために思うようには観察できない。それでも、カモシカたちの子育ての一片を覗き見ることができていたので紹介しよう。

調査を始めて三年目の五月、「ヒエゴ」と名付けているメスのカモシカを見つけたために、いつもの観察場に向いた。「ヒエゴ」は、私と付き合いだした時からでも二頭の子どもを育て上げているベテランママであるが、この日、そろそろ「ヒエゴ」が子どもを連れてくる姿がみられるだろうと思い探していた。

すると意外と近いヤブの中に「ヒエゴ」は座っていた。その姿を発見すると同時に、「ヒエゴ」の脇にかわいい子どもが座っているのを確認した。少しグレーがかった体色をしており、親は顔が黒いのに、子どもの顔は白くてよく目立つ。

「おー、今年も無事に出産したよ

うだな。しかしカワイイなー」てなことを言っている。と、「ヒエゴ」が立ち上がり歩き始めた。当然、子どもも「ヒエゴ」についていこうと立ち上がり歩き始めた。

ところが一生懸命に「ヒエゴ」の後を追おうとするのだが、足元がふらつき、ちよつとした段差があると立ち往生という状態であった。その子どもの状態から、この子どもが産まれてまだ二日ほどしか経っていないことに気が付いた。

カモシカも前回紹介したシマウマと同じく草食動物であるが、シマウマと違うのは子どもの運動能力が未発達である点だ。カモシカもシマウマと同じく、生後すぐに立ち上がる能力はあるのだが、しっかりと歩いたり走ったりするには数日が必要とするのである。

これは妊娠期間が短い証拠である。



生後2カ月の子どもを連れてきた母親

シマウマは約一年の妊娠期間であると紹介したが、カモシカは秋の交尾から約七カ月で出産する。その短い妊娠期間のために、産まれる子どもはシマウマのように達者ではないのである。

この妊娠期間の違いは、大昔から棲んでいる環境の違いからきている。シマウマはアフリカのサバンナと呼ばれる広大な草原が生活場であるが、

そうした開けた場所で子どもを産み育てる場合は、産まれた子どもはすぐに親と同じ運動能力をもっていないと、多くの肉食動物から身を守る事ができないのである。

一方、カモシカの場合は深い森の

中が生活の場であるため、身を隠す場所に事欠かず、草原と違い危険が少ない環境に生きている。そのため妊娠期間が短くなり、子どもはある程度未熟な状態で産まれるように適応したのである。

さて、生後一週間も経過すると、か弱かったカモシカの子どもも母親の行動に充分について行けるまでに脚力が発達するのだが、ここからカモシカの子どもは急激に成長していく。生後一カ月が経過すると、母乳と共にかなりの草や木の葉を食べるようになる。草や木の葉を食べるからといって離乳という訳ではなく、授乳期間は生後六カ月ぐらまではつづくようである。

生後五カ月の子どもが乳をせがみ、飲んでくれるのを観察したことがあるが、生後五カ月まで成長した子どもに乳を与えている母親の姿を見ると、少々滑稽である。なにせ親の半分ほどに成長した子どもが、荒っぽく下から乳を突き上げるようにして飲むものだから、母親は転ばないように必死に堪えているのである。その姿は微笑ましいというよりも、滑稽であった。

生後三カ月ぐらいで角が成長を始め、五カ月もすると外部から角の存在が分かるまでになる。生後五カ月ぐらいいになると、子どもと母親が別々に行動することが多くなり、母親とかなりの距離の所で子どもを観察したりする。

この頃になると、母親も子どもも常に一緒にいたがるという感じではなく、それぞれが勝手に行動し、

時々再会をして子どもが親に甘えるというパターンとなる。カモシカの子育ては、かなりの放任主義という感じを受けるが、子どもがそれだけ独立心旺盛であるとも言える。やがて子どもと母親が連れ添うことが更に少なくなり、子どもは一歳一歳半で母親の行動圏から出て行く。これが子どもの独立であり、カモシカの子育ての終了となる。

この子どもたちの独立する年齢が、本州のカモシカの場合とかなり違っている。本州での調査では、子どもが独立する年齢は二、三歳がもっとも多いと報告されているが、四国のカモシカは一歳一歳半と明らかに子どもたちの独立は早い年齢で起こっている。

本州で調査をしている人と話をしていると「子どもが生後五カ月ぐらいで単独行動をすること自体が、まづ見られない」と言う。それだけ、四国のカモシカは独立心が強く、母親も放任主義のような子育てをしているのだ。

さて、今年もカモシカたちの出産の季節がもうすぐやってくる。今年はどうな子育てを見せてくれるのだろうか。

（なかにしやすお・わんぱーく）
（こうち・アニマルランド）



じっとたたずみ、もの思いにふける「ノブシ」と名前をつけたオス

岡本弥太余聞 (完)

堀内 豊

池本寿が上京した年の冬―。
岡本弥太は刊行したばかりの処女詩集『瀧』（昭和七年十月五日、岡山県詩原始社発行）を、寿の勤める富士小学校（東京都台東区浅草）宛に送った。

寿が手にとると、巻中の「桜」と題するページのあいだに、付箋が挟んであった。

（せっかく頂いた詩集でしたが、東京の上空襲（昭和二十年三月十日）で焼けました。疎開しとけばよかったのにと、今でも後悔しております……）

池本寿の口調は、なにかもどかしそうに聞こえた。

昭和十七年（一九四二）十一月中旬。

中村伝喜は東京へ出張したとき、わざわざ池本寿を富士小学校に訪ねた。

（中村先生から、「岡本が入院している。だいぶ容態がわるい」と聞かされまして、突然のことでびっくりしました。わたし何も知らなかったものですから。

それで、是が非でも弥太さんにお会いしたいと、中村先生におねがいして、その日の夜行列車で高知へ行くことにしました。

車内で中村先生から、「高知に着いたら、まさきに橋田先生に連絡して、了解を得ないといけないよ。わかったね」と念を押されました。

ですから、高知駅に着くと、すぐに橋田先生に電話をしました。すると先生は、「見舞いに行くのは差し控えてもらいたい。由さんが付きっきりで看病しているから、ぜったい病院へ行つてはいけません！」と、つめたいことが返ってきました。

それでも重ねておねがいますと、「ききわけのないことを言うもんじゃない！」と激しく叱られました。

翌日は東京へ引き返す予定でしたが、知り合いがいる潮江橋の近くで、日暮れを待つことにしました。日没後に大野内科（高知市本町四丁目）の前まで駆けつけました。電車通りの北の舗道から、病院の窓をながめました。もちろん弥太さんがいる病室はわかりません。でも、あの灯のついた建物のなかに弥太さんが居る。ひと目でもいいからお逢いしたい……と思うと胸がこみあげてきて、とめどもなく涙がながれました）

そこまで話すと、池本寿はこきごみに肩をふるわせて、唇をむすんだ。その直後、私のほうをみて激越なこぼを発した。

「あのとき無理強いしてでも、弥太さんを東京へつれていけばよかった。いまのわたしなら、どんなことをしてでも、弥太さんを奪っているわ。うばっちゃんばよかった……」

私は瞬時、息をのんだ。

岡本弥太と離別して四十五年の月日が流れたのに、池本寿の胸のなかでくすぶり続けてきた愛重の焔が、この期に及んでさらに燃えさかろうとは――。

私はしばらく座をはずした。書齋に入って、「岡本弥太詩集」（昭和三

十八年五月一日・高知県文協会刊）をとり出してきて、池本寿に手渡した。

彼女はページをめくっているうち、「桜」の詩が載っている箇所で見線をとめた。一息入れると、ゆっくり音読をはじめた。

おたっしやでゐて下さい
そんな風にしか云へないことばが
さくらの花のちるみちの
親しい人たちと私の間にあった
そのことばに
ありあまる人の世の大きな夕日や
涙がわいてきた。

私は
いまその日の深閑と照るさくらの
花のちる岐路に立ってゐる

おたっしやでゐて下さい
私はその路端のさくらの花に話し
かける
さくらは
日の光に美しくそよいである
（原文のまま）

音読を終えると、池本寿は座卓のうえに顔を伏せて、しばらく忍び泣きをした。

1998・3・5
（ほりうちゆたか・雑文家）

民俗雑記帖1 東と西

梅野光興

私が高知県に来てから、早いもので十年近い歳月が流れた。歴史民俗資料館の準備室に入ったのが、ついでこの間のことである。歴史民俗資料館が開館してから数えても、この五月三日でまる七年になる。その間、私は歴史の学芸員として、県内外の民俗を調査し、企画展などによってその成果を公開するという仕事を続けてきた。このエッセイでは、仕事の中で見聞きしたことや、調査や展示の際に感じたこと、考えたことをあて

どなく綴ってみよう。

「高知県に来てから」という風に見えるが、私は歴史民俗資料館に入ったとき、はじめて高知に来たわけではない。その前高知大学に四年間通ったことがあった。しかし、朝倉キヤンパスは一種学生たちによる別の社会であり、高知人と交わった経験はあまりない。だから、就職したときが日常的な高知体験のはじまりと言つてよいだろう。

とにかく救われたのは、高知の人々に排他的な感覚の無いところである。もちろん言葉の違ひから「あんだ、高知やないろう」とつっけんどんに言われることはあつても、それはその場限りのことで、だからどうということはない。逆に同僚や友人たちのさりげない心づかいに救われることが多かった。飲み屋の片隅でやはり同じ県外から来た人が「高知ほど住みやすい所はない」と語っているのを聞いて、ひそかにうなずいたりしたものだ。

高知人の開放的な性格はどこに由来しているのだろうか。さまざまな理由が考えられるが、ひとつには伝統にそれほどこだわらない気質と関係があるように思える。高知の代表的な祭りである「よさこい祭り」が、伝統的なスタイルを守るのではなく、それを破壊し改変していくことを特徴とする祭りであるのは象徴的だ。高知は、常に新しいものを取り入れようとするとする気風をもつた所なのである。

民俗文化の面からみると、鹿児島県など南九州には独特の民間伝承が豊富にあるのに対し、同じ黒潮圏でありながら、高知県では、高知独自といえる民俗はそれほど目立たない。一方、高知県の民俗の分布をみると、中央部を境に東部と西部の差異が目につく。例えば神楽では、西部の津野山神楽や池川神楽と、東部の祈禱と結びついた神楽では異なる感じを受ける。盆棚は、中央部から東部にかけては水棚と称して家の庭先に作る形態が広がっているが、西部では水棚とは言わず、屋内に作るスタイルが多い。そして西部の神楽や盆棚は愛媛県と、東部の水棚は徳島県と連続した分布をみせるのである。

東西の差異は、現代の民俗に限った話ではない。弥生時代後期の青銅

器の分布図をみると、東部は銅鐸、西部は銅鈴というはっきりした違いがみられ、両者の分布は中央部で重なっている。そして、銅鐸の分布域は徳島県から近畿に広がり、銅鈴の分布は、愛媛県から北部九州に広がっている。これは、当時の高知県に近畿地方と北部九州から文化が流れ込んでいたことを推測させる。古墳時代になつても、高知平野にそれほど大きな古墳が造られていないことを考えると、高知県中央部には、オリジナルな文化を創造するような力は育たなかったのではないかと思われる。

このような地域は、周辺の文化に対し開かれており、それを吸収することになるだろう。古代や現代にみられる東西の文化差には、そのような高知の文化の特質が反映されているようだ。もちろん吸収するのは文化ばかりではなく、外から訪れる人間もその対象となるだろう。

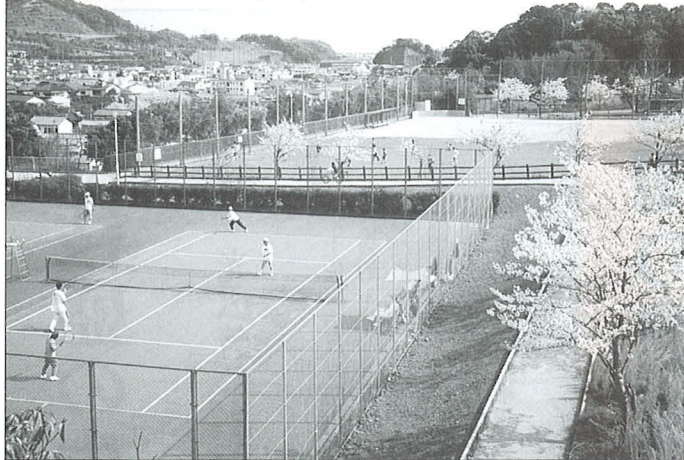
よそ者である私たち県外人に対して、あまり抵抗感が無いのも、そのためではないだろうか。なぜなら、高知の人たちもまた、ある時代によそ者であった記憶をどこかにもっているのだから。

（うめのみつおき・高知県立歴史民俗資料館主任学芸員）



年々、進化する祭り「よさこい祭り」

散歩の途中で



高知城をはじめ市内には桜の名所がいくつかあるが、横浜新町の中にある瀬戸公園の桜も実に見事なものである。テニスコート、球技場などの周囲を取り囲むように百本ほどの桜が植えられている。プレーの合間に花見をしゃべりこんだり、家族連れがお弁当を広げている姿も見られる。瀬戸の住宅街のはるか向こうには、ほんの僅かではあるが太平洋が見え、晴々とした気持ちになる。

風俗

「私」と「公」

もがお互いに意識し合い、まるで美を構成するための役割をしっかりと見極めているかのようであった。

通りの両側に並び家々の窓には、美しい花がさりげなく飾られ、歩いていても本当に楽しく、ついでどこかの国と比較してしまっただが、これは単に小生の僻みっぽい性格

かつて、多くの日本人がそうであるように、駆け足のような形で北欧を旅したことがある。

その時、特に印象深かったのが、「街並みの美しさ」であった。別に取り立てて飾った訳ではないが、しっとりとした落ち着いた雰囲気、しかも、通りを構成するいずれ

からだけでは無いと思う。我が物顔で、立ち並ぶ建物、単に目立つことのみを意識したネオンや看板等々、まさに「無責任」のみがはびこっている状態は、この国に暮らす人たちにどんな風に映るだろう。

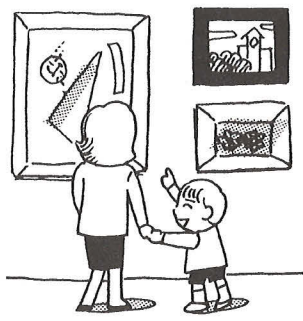
戦後、わが国のこうした都市景観面での運営は、都市計画法や建築基準法に見られるような規制はあるものの、その基調はあくまで「私権」の保護であり、「公」はそのため存在してきたと言える。勿論、民主主義社会においては当然のことであり、そのことを否定するものではない。しかし、もうそろそろ「私」のための「公」だけではなく「公」のための「私」についても考えてみる必要があるだろう。

オランダでのガイドの「住む人によってこんなにも街が美しくなります」という言葉が、今も耳に残って仕方がない。(道駅)

賛助会員募集中!!

会費：年額 2,000円
 特典：① 機関誌「文化高知」を年6回お手元にお届けします。
 ② 事業団発行の出版物の10%割引(一部例外あり)
 ③ 主催事業や刊行物の案内(マスコミ利用の場合あり、直接事業団で購入する場合に限る)
 [※お申し込みの日から1年間有効]
 お申し込み：①郵便振替②現金書留③直接事業団へ…
 いずれの方法でもけっこうです。

ご利用ください 市民フロア

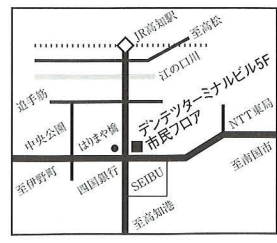


個展・グループ展・会議などに最適です。

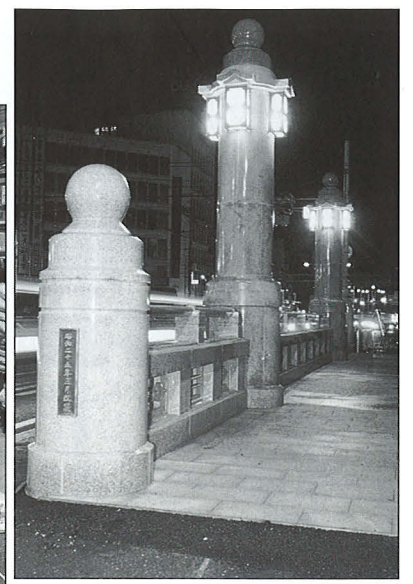
- 広さ・内装 約96㎡・壁面布クロス張り スポットライト完備
- 使用時間 *展示 午前9時～午後6時 *会議 午前9時～午後9時
- 使用料

	展示に使用	
利用時間	1日	1週間
使用料	11,000円	70,000円

- 休館日 *毎週水曜日(搬入・搬出日) 年末年始



●お問い合わせ (財)高知市文化振興事業団 ☎ 73-4365



第14回写真コンテスト・高知を撮る入賞作品

高知を撮る

変遷 (3枚組) 宮脇正光

「だあさ、お立ちあ、ご用とおいそぎのないかたは、ゆっくり聞いておいで」という枕詞に始まって、やがて、「墓蟬噪四六のがまの油」の、成分・効能のくだりにさしかかる。

「赤いは辰砂椰子の油、てれめんとてえかにまんでえか、金創には切り傷、効能は……」

啖呵の古典として、昔からおなじみのものに、薬語に出てくる、がまの油売りの口上がある。

「結構毛だらけ猫灰だらけ、見上げたもんだよ屋根屋のフンドシ……チャラチャラ流れるお茶の水、粋な姐ちゃん立ち小便……」

てれめんとてえかにまんでえか



風俗歳時記

室町時代末期から、(南蛮)との接触を通じて借用された、ポルトガル・スペイン語系のことばが、思わぬところに身を潜めていたのである。(朴)

とあり、(○)という標示がついてい

小学生の頃から、「てれめんとてえかにまんでえか」という奇妙なお呪いのような文句は、いったいなんだろう」と、不思議に思ってきた。

先年、井沢実著「スペイン語入門」を読んで、「てれまんでいか、まんでいか」という、がまの油売りの口上の、マンチカは manteca (バター) というスペイン語である、と教えられて、やっと多年の胸のつかえがおりた。

その後、『外来語辞典(榎垣実編)』に当たってみると、〈マンチカ〉の項に、「いのしし・ぶたなどのあぶら(言葉にまぜたり、機械にぬったりした)」

植木枝盛の生涯

外崎 光広著

四六判・上製本・二六〇頁
本体価格 一、九〇〇円



土佐自由民権期の最高の理論家植木枝盛の果たした思想的・社会的・政治的業績と、身上に発生した私的事件を簡潔にまとめた第一部「植木枝盛の生涯」(高知新聞連載記事に加筆)と、枝盛憲法草案と立志社憲法草案の關係や、その死因を解明した論考を集めた第二部「植木枝盛の研究」に、年譜を付した。土佐の自由民権運動を語る上で欠かせぬ人物植木の絶好の入門書。

高知の農業

山岡 浩著

A5判・並製本・二四八頁
本体価格 一、八〇〇円



今、新たな道が問われる日本農業。この時に当たり、農協組織に半世紀近く務めた筆者が地域農業・農産・農に生きる人々を具に訪ね高知県農業の実像を明らかにするとともに、特徴的な産地づくり事例を紹介した書。高知県農業を知る上での格好の入門書であり、かつ今後の農業の在り方を示唆する一冊。

外崎光広 著

土佐自由民権運動史

土居重俊・浜田敦義 編

著者の四十年に及ぶ研究を集大成。新資料による知見も盛り込みながら、土佐自由民権運動の全容を通史として明らかにした。A5判・上製本・四二四頁
本体価格 二、七一九円

高知県方言辞典

依光裕 編著

古語から現代語にいたる土佐言葉一万四、七〇〇余の意味、用例使用地点等を明示、注釈も加えた土佐方言唯一最大の辞書。A5判・上製本・七三六頁
本体価格 六、〇〇〇円

珍聞土佐物語(上・下巻)

五十人の語り部たち

土佐の山や海辺の村の閉じこもった古老が語った地元の伝説や小咄の数々。親から子へ、孫へ語り継ぎたい「ふるさと」がここにある。四六判・㊶三九二頁、㊶四〇八頁
本体価格 各巻一、五五三円

岡林清水 著

高知県文学散歩

高知県の文学を地域に即して紹介その舞台、歴史、作家の足跡等を訪ねて歩く。旅のなかの文学史。ともいえる文学案内。四六判・二七八頁
本体価格 一、七四八円

土居重俊 監修
高知市文化振興事業団 編

土佐弁 土佐日記

紀貫之の名著『土佐日記』を、現代とさことばでつづる。古典を身近なものにするとともに、土佐弁にも親しめる楽しい本。B6判・上製本・一三〇頁
本体価格 九七二円 (第二刷)

高知の森林

高知県緑の環境会議森林研究会 編

高知の代表的な山と森林をつぶさに探訪し、残されている貴重な自然や植生、森林と人々とのかわり合いの歴史、現地への道のり等を紹介。B5変型・二二二頁(第二刷)
本体価格 二、四二七円